

フィリピンにおけるスペインコミュニティ

(1935年－1939年)

フィリピンにおけるスペインコミュニティ

(1935-1939年) :

その変化とアイデンティティに対するスペイン内戦とフィリ
ピン独立準備開始の影響

Florentino Rodao

平成18年度提出 博士学位論文

東京大学大学院

総合文化研究科博士課程

地域文化研究専攻

本研究は、1935～39年のフィリピンにおけるスペインコミュニティの分析を行う。1575年に開始されたスペイン植民地化を機にフィリピン諸島に数世紀に亘り定住してきたスペインコミュニティは、スペインの植民地時代の終焉を迎えた1898年、そして本研究の対象期間において、フィリピンの将来を決める事態に直面した。1935年11月にコモンウェルスが設置されると、1946年のフィリピン独立に向けての移行期間が始まった。同じ時期、1936年7月にスペイン内乱が勃発すると、スペインコミュニティは新たな衝撃に苦しむことになった。本研究はスペイン内乱戦争が終結し、そしてフィリピン独立のための主要な法的準備が完了した1939年春までを研究対象とする。

1898年にアメリカ合衆国のフィリピン支配が始まった後も、スペインコミュニティはフィリピン諸島で重要な役割を維持した。経済面では、スペインコミュニティは植民地時代の終焉という変化に順応した。新しい入植移民たちの到来と商業面における特権の喪失に直面したスペイン系企業は、主要な活動対象をアメリカ市場に移した。第一次世界大戦中における対ドイツ植民地政策は、コミュニティに大きな経済成長をもたらした。社会面では、コミュニティとその附属施設団体である **Casino Español** は、フィリピーノコミュニティの中で重要な位置を占めていた。文化面においては、ヒスパニックアイデンティティは活気を維持した。このことは、例えば、1930年代末にスペイン語の日刊新聞が80,000部の発行部数を超えた事実に反映されている。当時フィリピンにおいてスペイン国籍を所持していた住民は5,000～7,000人にすぎなかったが、フィリピン社会に強く残存するスペイン文化は、アメリカ化に対抗しうる要素を含んでいた。

フィリピンにおけるスペイン企業の重要性、フィリピン社会に広くかつ深く入り込んだスペインコミュニティ、そして当地におけるスペイン文化の存続は、スペインコミュニティの指導者達の影響力がコミュニティ外にまで及んだという事実にもみられるように、コミュニティがフィリピンにおいて重要な政治的影響力を持っていたことを説明している。

しかし、この肯定的な状況は、本論文が研究している二つの出来事をきっかけに崩れ始めた。1935年11月、コモンウェルスの誕生は、スペイン社会の利益にとって大きな脅威となった。なぜなら、コモンウェルスは議会審議の結果、スペインコミュニティの生活を脅かす、外国人特に土地所有者に不利な法律を制定したからである。1936年7月、イベリア半島でスペイン内乱戦争が勃発すると、フィリピンにおけるスペインコミュニティは地理的距離にも関わらず、大きな関心をよせた。スペインコミュニティの中では、スペインマドリッド政府を支持した親共和国派と、反乱を支持する親フランコ派に分かれた。この分裂は長い期間続くことになり、非常に深い傷跡を残した。初めの数ヶ月間で緊張感が高まり、わずか3年という期間で修復不可能な憎悪と対立を生んだのである。フィリピン諸島においての、スペイン内乱戦争の特徴は、第一に、フィリピンの独立へのプロセスと重なった事、第二に、他では南米の小さなコミュニティ社会だけに見られた親フランコ派の絶対的な優位、第三に、スペイン本国と同様に親フランコ派内でのイデオロギーの多様性の三つであった。

第一に、共和国派は当初から少数派であった。共和国派は、主に活力に欠けた老兵士達によって指導されていたが、雑誌“スペイン民主主義”を通して、フィリピン社会に重要な影響を及ぼした。共和国派は、政治的には、共和主義左派に近いイデオロギーを持った穏健派であり、無政府主義者及び共産党員の存在はそれほど目立つものではなかった。彼らの批判は、スペインでの反乱派を支持したフィリピン国籍であ

るがイベリア半島出身のメスティーソ、及びカトリック教会に集中した。特に後者に対しては、過激な態度をとった。

第二に、親フランコ派は、スペインコミュニティー内で最も支援を受けた団体であった。親フランコ派の経済力は、金銭、物資、そして第一線に送られた兵士達という点で、共和国派よりずっと多い援助を可能にした。親フランコ派とフィリピン政府高官の親密な関係ゆえに、ワシントンが求める内政不干渉政策があったにも関わらず、フィリピン政府は、親フランコ派による本国援助はもとより、親フランコ派のプロパガンダ運動を禁じる手段さえもとらなかった。

フィリピン諸島で最も重要であった事は、時間と共に親フランコ派内において、ファランヘ派と、保守派の間で緊張感が高まったことであろう。直接的な暴力衝突はなかったものの、論争は極端な結果にたどり着いた。すなわち、本国における勝利の際や記念日には別々に祝い、さらにそれぞれ異なる刊行物を発行した。これらは半島への募金収集活動へも影響した。対立は全く異なる考え方や気質の違いから起こった。すなわち、伝統的なイデオロギーを持った昔からの右派と、フランコを崇拝するファランヘ派である。他のヨーロッパ諸国のファシスト運動と同様に、ファランヘ派は、伝統的な寡頭政治の担い手すなわち保守派に挑んだ。多くのエネルギーをフィリピンのスペインコミュニティー対策に費やしたが、ファランヘ派は保守派からの抵抗を受けた。その結果として1937年後半からフィリピンの親フランコ派は、共和国派との争いよりもむしろ、派内論争に重点を置いた。これらは、スペインやラテンアメリカ地域において、1936年のクーデターを支持した人々の間で内部分裂が生じたことと同様であった。

これらの出来事がコミュニティーの生活に与えた影響は、大きかった。経済面では、フィリピンの将来の独立へ向けての変化に対して、スペイン人はほとんど準備を行な

うができなかった。そして、スペインの企業は、新しい法律によって、外国人による土地所有及び大多数の企業の維持が禁止されたことにより、大きなダメージを受けた。フィリピン諸島で政府の次に多数の従業員を抱えていたフィリピンタバコ会社は、多大な打撃を受けた。スペインコミュニティーが激しく対立する3つのグループに分裂したことは、あらゆる相互協力を不可能にした。例えば、スペインコミュニティーは、協力してスペイン語を国家言語に推薦することもできたが、内部分裂はそれさえも困難にした。最後に、スペイン内乱戦争は否定的なイメージをもたらした。このことは、フィリピンのアイデンティティ構築におけるスペインの貢献度の評価に不利な影響を及ぼした。ヨーロッパでの暴力的なニュースや大虐殺は、フィリピンではスペインコミュニティー内での暴力的な対立や論争と結びつき、それまで高く評価されてきた文化面や社会的地位などのスペイン人のイメージは、ファシズムと関連して考えられるようになった。フィリピン社会に残る宣教師に対する憎しみは、共和国派の教会批判によって増強されもした。全体的に言って、フィリピン社会の「スペイン」イメージの変化は、フィリピン・アイデンティティへのスペインの貢献に否定的に働いた。

本研究は、フィリピンのフランコ派内の分裂は基本的にファランヘ派と反動的な保守派との間の対立に見られる勢力争いであり、その他の側面、例えばコミュニティー内における第一、第二世代間の論争などは二次的であったと結論づけた。ファランヘ派はヨーロッパ風のファシスト運動であり、他方、反動・保守派はむしろよりフィリピンのであった。本国スペインにおける類似した対立と比較することによって明らかになるのは、フランコ将軍のリーダーシップの有無の重要性である。つまり、本国においては、フィリピン諸島とは異なり、フランコ将軍のリーダーシップが強かったために、軍がフランコ派の中心的役割を担ったということである。

1936～39年は、フィリピンのスペインコミュニティにとって岐路となった。この期間を経ると、かつてのスペインコミュニティの活力はもはや回復することはなかった。その後が生じた出来事——アメリカ合衆国によるファランヘ派の危険性の誇張、1941年の財産保持のための国籍変更、日本による支配、1945年日本軍によるマニラ大虐殺——によりスペインコミュニティの状況はよりいっそう悪化していった。